

2012年東京教区新年礼拝説教

2012年1月7日
聖アンデレ教会
主教 大畑喜道

新年明けましておめでとうございます。新しい年を迎え、こんなにたくさんの信徒と司祭団と共に新年礼拝を捧げることが出来ますことを本当に嬉しく思います。昨年は大変に色々なことが起こりました。主教按手の後、1月後の3月の大震災、タイの洪水、また暮れは北朝鮮の指導者の死、新年明けても直後に大きなゆれが襲い、一昨日は千住の教会の隣家が火事になるなどの出来事が起こりました。辰年、昇り龍の年と言われても空元気と言われそうな雰囲気は漂っています。未だに避難生活を強いられている人々がいること、原発事故が収束し得ないでいることを考えていくと、様々な困難、恐怖が渦巻き、時には諦めムードや厭世観が支配するような時が過ぎている現実の前だからこそ、こんな時代だからこそ、私たちはますます責任も重大なことを自覚しなければならないでしょう。誰かに任せておけば大丈夫だ。ではなく、キリストに招かれ応答した私たちはその働き場や、働き方は異なりますが、今年も本気で一人一人が福音の働きをこの世界に示してまいりたいと思います。今日は1月7日、昨日は顕現日でした。今日は顕現日の聖書日課を用いて一言お話をさせていただこうと思います。

「顕現」「公現」「現異邦」はギリシア語では「エピファネイア epiphaneia」で「輝き出すこと」です。イエスにおいて神の栄光の輝きが現れたこと、イエスが神の子キリストとして現されたこと、それは降臨節・降誕節全体の大きなテーマです。イザヤはこのような預言をしています。「起きよ、光を放て」。今すべてのことが思い通りに行ったという現実ではなく、暗闇の中にあるけれども「起きて、光を放ちなさい」この順序はとても大切なことです。60章は第三イザヤが書いたものとされていますが、長いバビロン捕囚から解放されてエルサレムに戻り、神殿再建に取り掛かろうとするとき、正に時代的背景としては大きく転換する時になされたものです。廃墟と化した街を見つめながら、本当に大丈夫だろうか、そんな疑問符を心に抱きながらも、困難にありながらも希望を持って歩み出した時代に、偉大な預言者イザヤを偲び無銘の信仰者たち、預言者集団が記したものです。私たちはいつもこの世のものに目を奪われ、人の声に耳を奪われやすい存在です。私たちが何処を見つめていくのが重要なことです。預言者たちは現実が上手くいったから神を信じなさいと言っているのではありません。まず始めに起きよ、光を放てと呼びかけています。今まだ暗闇の中にいる。その中で、神は着々と働いておられるのです。しかし神の栄光は既に成就する。と続いています。私たちはいつも神の現実と実際に見えるものとのギャップに信仰を揺るがされてしまいます。しかしと言う言葉に対して二つの立場が取れます。第1の立場は、神は私たちに愛してくださると言っ

ている。しかしこの暗い現実ではどうして信じられようか。第2の立場は、現実には確かに厳しい。しかし神の言葉ゆえに信じていこう。人間の側から物事を判断するか、神の側から、物事を判断するかどちらからしかしと言う言葉を捕らえていくかで私たちの生き方はまるで変わっていくのです。

ダニエル書の中で、バビロンの王ネブカドネツアルは、自分を神として拝めと命じます。三人の信仰者は決断を迫られます。「シャドラク、メシャク、アベドネゴ。わたしを拝め、そうでなければ、火の中に投げよう。」今、心を入れ替えて私を拝むならば許してやろう。」慈悲深さを装い、人々にそれを示すかのように王は彼らに迫ります。しかし彼らは「自分たちの信じている神は王の姦計から、悪行から救い出してください。燃え盛る火の中から救い出してください」と啖呵を切ります。そして「たとえそうでなくても私は神を信じるほうをとります。」と言うのです。たとえそうでなくても私は信じていくそれが私たちの信仰生活の基本になればなりません。何処までも神中心に生きるかどうかを私たちはいつも決断を迫られています。悪魔は私たちに巧妙に近寄り、あるときは力づくで、あるときは優しくやんわりと近付いてきてもっともらしい言葉で迫ってきます。今年もそうした意味では悪魔の誘惑と言うものは避けて通ることはできないでしょう。新約聖書にも「たとえそうでなくても」という信仰の話が、人間的な思いが中心となることを避けるようにとの話があります。有名な百卒長の僕の話をお出ししてください。彼は自分の僕が病気になる、イエスに懇願します。行ってやろうと言うイエスに対して、自分は部下には右に行けば右に行く、左に行けば左に行く。だからみ言葉をくださいと頼みます。彼にとって部下の容態がどうなるかは問題ではなかった。み言葉をいただけるかどうかだ。「主よ、我は汝を我が家に入れるに足らぬものなり。されどみ言葉をたまえさらば僕はいえん」やがて朝が来ると信じるものには今の暗闇は問題ではない。神が朝をきたらせてくださることを信じて進んでいく、ましてや顕現日を祝う私たちは光が来たことを、共に歩んでくださることを信じている者ではありませんか。このことがこの世界を変えて行くのです。本気でそのことを信じていけば伝わっていきます。美辞麗句を並べた説教も祈りもある意味必要ではありません。何か武器が必要でもありません。

昨年末に洗礼を受けた方が、自分が体験したことを話してくださいました。アメリカに留学し、孤立し何もかも上手くいかなかった。失意のうちに帰国をまじかにしていたそうです。帽子を深く被りある日地下鉄に乗っていた。目の前に妊婦が立ったので、勇気を奮って席を譲ろうとしたけれども、すぐにおりるからと断られた。すべてを否定されたような感覚に涙がとめどなく出てきたそうです。悲しくて悲しくて、どうしようもないやりきれない気持ちになって、溢れる涙を抑えきれない。そのとき、かの妊婦が手を握って言ったそうです。「あなたに私の心を伝えたい。花に託して伝えたい。しかし私には何も無い。あなたはとても疲れていたのね、悲しかったのね。大丈夫よ。」二人の冷たい手がやがて暖かくなり、そして止まらぬ涙は暖かい涙に変わっていた。帰国したら教会があった。朝のしじまの中でミサに参加して、また暖かい涙が溢れてきたそうです。神は自分のいろいろな困難を乗り

越えさせてくださる。そして牧師に洗礼を受けさせて欲しいと願ったのだそうです。決して牧師の名説教でもありません。きれいな花もありませんでした。暖かく迎えてくれた、信じる群れが、祈りがそこにあった。手を握ってくれた暖かい思いがあった。そこに回心の気持ちが出てきた。神の愛を感じた。

本気で神を信じる共同体として今年も進んでまいりましょう。肉に従って日を過ごし、肉とその思いとを欲するままに行い、ほかの人々と同じように、生まれながらに怒りの子であった。しかし神が私たちを作られたのはそうではない。よい行いをするようにと創造された。あの手この手で神は正しい方向へと導こうとされているのです。怒りの子となったものを光の子としてくださいます。神からの恵みを受けて福音の僕とされます。神の計画は何だったのか。神は私たちに力を働かせて恵みを賜り、約束を受け継ぐもの、福音に仕える者とされたのです。冷たい涙を流し、打ちひしがれている人が温かい感謝の涙を流すことができるようにと準備してくださっているのです。そのためにどうかこれからの一年を力強く進んでまいりたいと思います。